



史學童觀抄

初篇  
上

リ伊5  
4051  
6-1



市川清流先生述  
松本楓湖先生画

史 學

武家童觀抄

一名日本外史註解  
從吾所好齋藏板

叙



市川清流有武家童觀抄之著渴年序  
予受而讀之乃為書其首曰我國有平  
源二氏猶漢有嬴政政有閻龍於今古史  
學上畫一大鴻溝故賴子成特述其源以  
下事昭有日本外史之著敘事詳確以文  
有體頗稱良史今之學者殆亦家置一本



門リ伊 5  
4051  
1-6

焉然其編也書以渙文童稚者或難誦習  
是斯著之不以不得已也斯著體全倣外  
史特以假換真以俾易雅間挿以繪圖而  
事專係武門柄政以降之事則題以武家  
童觀少當矣抑

皇綱之解紐也久矣今也天誘其衷際此  
復古之運則今之講史者不當以平源以

下自足必將溯攷古昔經乃童稚之所宜  
講習法既既有新著請更續編一書叙禮  
原奠 鼎以來以至保平之際題曰

皇朝童觀抄又更溯其源詳叙五七之際  
以至天地剖判之初題曰

神代童觀抄則予亦將不厭數為之序也

明治庚午仲夏蓬舟仙史



史學童觀抄序

發蒙之具不備也久矣。幼童輩有  
記性者。雖好讀稗史野乘。而其書  
大率荒唐悠繆。謠訛百出。不則怪誕  
不經。徒以增惑。長癡。大道明義之不  
可不知者。辨之不精。偏說瑣言。無關  
體要者。衍之盈卷。故童以至成。習慣

如一日。甘小知而不能通方。是智慧之  
所以不開。而其咎由素習之亡緒。亦蓋  
邦各有文。乃有學。據其文學其學。  
萬邦合然而世稱正史者。童蒙固  
不易誦讀。僅能讀之。亦不易通其  
義。是以曠日弥久。費精於句讀。如國  
史。且有不能暗熟。况其他乎。可謂

可憾矣。今斯書體得其要。以便習讀。  
洵多學津。逮也。由是略知治亂興  
亡沿革之理。於其開智慧。豈為淺  
益乎。刻成為書其首。

明治三年庚午四月

霽山杉浦讓撰



桂洲伊藤圖書



平氏家系

人皇五十四代

品桓武天皇

諱山部号柏原  
 帝天應元年  
 四月受禪延曆  
 廿五年三月崩壽  
 七十七歲葬山城國柏原陵

葛原親王

一品式部卿賜輦車  
 母夫人三木長野女

高見王

無官

從五位下上總介平高望朝臣肖像



皇二

平高望

從五位下上總介  
寬平元年四月始賜  
平姓

良望 常陸大掾  
平國香為  
將門所討

貞盛 初名平太  
從五位上

右馬允常陸掾鎮守  
府將軍義平三年二月  
於下野將門戰敗  
追而至于慈幸嶋射中  
將門殊有戰功

維衡 上野介檢非  
違使在門佐  
貞盛四男

鎮守府將軍平貞盛朝臣肖像



正度 常陸介  
正五位下

維盛 右兵衛尉

正衡 右衛門尉

正盛 因幡守後  
讚岐守從四位下

忠盛 備前守正  
四位下聽內  
昇殿院執柄

備前守平忠盛朝臣肖像



清盛 仁安年月  
從二位太政大臣賜隨身兵杖聽  
乘輦車出於宮中  
時年五十同三年  
十一月削髮法名  
淨海養和元年閏  
二月薨行年六十五歲

平相國清盛入道  
淨海公肖像



史學童觀抄卷一

平氏

平氏は人皇五十代桓武天皇より出天皇の夫人多治比真宗夫人後宮職員  
令妃二女

四子を生長と葛原親王と称す親王天子の御子の中を親王  
宣下とて天子が御免無れば

見王御孫高望王親王の御子と諸王といひて御實名の下に子の字を付て大抵  
三世の義を其後は姓を賜ふ人臣に列する例ありと云宇多天皇

寛平元年に至り高望王の姓を平氏と賜ふ王の四子あり國香良將良兼良文

といふ國香の子を貞盛といふ弓馬に長ず良將の子を將門といふ性桀黠なり承

平中國香常陸の大掾なり良兼下總介なる大掾介國司の四分配當に守り掾  
目とす守は其國の頭なり

皆將門と源あり事繁れば権を置介は頭物役なり事多れば權の介をかく掾は役中の  
取あつたをさす事多ればは大掾少掾を置目は右筆事多れば大目少目を置





將門終に國香を攻殺す貞盛京師に在て之を聞官を棄て東下り父の讎を復せんと欲し良蕪及び從弟良正と共に將門を攻らんとも利あらば貞盛謂く此私闘なり勅を受けて討み如く潜西上して請ふ所あらん乎將門此を偵知て途に信濃に要撃す貞盛大に敗り身を脱れて京師に入る此より將門の勢稍強大なりて遂に下野上野武藏相模を攻取下総猿嶋を偽宮を建て文武百官を置此時に當て伊豫掾藤原の純友無て將門と謀り合任滿て還らば海島に據て盜を為し近隣を劫掠し又潛入を京師に遣て坊市の火を放遙に將門の應ず時天慶三年朝廷兵を發して將門を討伐せり此に下野の押領使藤原の秀郷といふあり

**押領使** 國司の外に此職を置隣邊に一採蜂起或は盜賊劫奪など有時は公命を蒙り私威武を以て是を平らけ其地を熱心領するを國司に

貞盛は從ひ兵を合して急に將門を襲ふ

將門防に能はば走て嶋廣山に據る貞盛其營を火大に山北に戰ふ將門又敗れて單身出で貞盛追馳射て右額の中馬を墮るを秀郷進んで其首を斬り此に於て黨類悉く誅し伏し首を京獄に梟す

**梟** 説文に梟は母を食ふ不孝の鳥なり依て

冬至り梟を捕へ之を磔す故に梟の字は鳥の首の木上にある事なり昔時は重罪者の首を斬り獄舎の門上の掛梟すなり今世の俗之を惟獄門とのいふは義を失ふ也此に於て八州皆定まる純友尋て平貞盛此功を以て從五位上叙し後從四位に遷り鎮守府將軍に任じ陸奥守を兼鎮守府將軍

十五代神功 皇后三韓を伐玉に鎮守府將軍を遣して其後を治めしれりよりて此称發れり古は日本の中にも東夷動れば王命に背くが故に四十五代聖武天皇の御宇に始て國司の外に東征の將軍を置玉に鎮守府に任じ要警を備えられりなり

世に是を平將軍といふ貞盛四男あり李子維衡最勇あり下野守に任ず

平致頼源頼信藤原保昌と此四將を時人呼んで四天王と称す

四天王 佛守護に多聞持國增長廣目の天王ありて四方を衛る此意を取りて四天王の目は發れり十代崇神天皇の十年に始て四道將軍を置玉以て四方を衛りて免るは佛法の末に本朝に

渡つる時ちんべ暗の四天王の意合せしをのちり猶後世に至ては武勇拔群ありて維衛の方面に當り其君主を護衛する武夫四人を撰ひて之を目して四天王と稱する事なかりたり

曾孫正盛武幹あり時平氏と源氏と並み武臣となる中も源の義家

宗黨尤強し長子義親對馬守と為り九州を剽掠し官使を殺す

より隱岐の國に流さん逃れて出雲に歸り吏を殺し貢賦を奪ひ勢

甚と猖獗あり之に依て天元元年正盛詔して追討使と為し鐸鈴を

賜ひ鐸鈴 思て昔時は王事に干役する臣下此鈴を賜はり此を馬に附て過る時日夜中をも關門を啓て通す事となり又庶民も毎年の貢物を官に運ひ納

時平は之を賜はる貢物を駄馬に附るなり我日本紀孝徳天皇 兵を率おろし

大化二年は關宿を定め馱馬傳馬は鈴の契を付といふ事あり

之を討し義親と戦ひ首を斬て京獄に集せし正盛の子を忠盛といひ

伊賀伊勢の間居る人と為り一目を眇す大治中山陽南海に盜起り

時忠盛之を追捕して功あり白河鳥羽の二上皇の事へ並に寵あり

**上皇** 天子の御位を辭し玉ひて後の尊号なり 後但馬守の叙し昇殿を聽さる舉朝これを嫉み

節會の總名なるなり節會といひ天子出御ありて御前にて臣下は御饗食應を賜はる

御行事ありて新嘗 忠盛之を洩聞て曰く朝すは諾を蒙り朝せされば

法とある其宗と辱るは一なりと意を決し刀を帶して入る家人平貞家

其子家長と哀甲して従ふ忠盛殿を昇り刀を抜は刀光外射す衆大

に恐れ敢て發せし既よ宴よ及び忠盛を召し舞を命せる衆歌て曰く

伊勢瓶子醋甕ありと是即瓶子を平氏に醋甕を眇し通はせ忠

盛を嘲笑するなり忠盛之を愧宴を終ひて退き主殿司を呼び刀を

脱し授りて出づ **主殿司** 殿上及び庭上を掃除し松明

衆忠盛の劍を帶して

國史直書卷之... 卷一

殿より私に從卒を具せし等の法を正さんと劾奏す上皇敬焉せぬ  
忠盛を名て之を問ふ忠盛謹んで對ふ臣が家人の竊に尾に來るは  
曾て之を覺え候はば惟其罪を仰ぐのみ其佩刀の如きは主殿司より  
問はせぬべしと乃ち主殿司より刀を進む之を觀る木刀に銀を塗  
るなりこれに上皇其用意の良苦あるを感とさせし後問ふところ  
無かりし忠盛累遷正四位下刑部卿に至る仁平年中卒去す忠盛は  
七子あり清盛經盛教盛家盛頼盛忠重忠度といひ清盛最を寵  
貴を極む大治年中左工門尉に任し累遷して從四位下安藝守に至り  
海に航して任む赴く時一魚跳て其舟に入たり或此を家に興すの兆  
ありといふ是より先保安四年鳥羽帝太子に位を禪る是を宗徳帝と

申奉る 御母璋子幼より白河法皇に養はる **法皇** 上皇の御法皇也

宇多帝と亭子 鍾愛長すお及で衰へば頗る物議を涉る此を以て鳥

羽上皇宗徳帝を子と視ぬは上皇の寵姫を得子といひ美福門

院と号す **門院** 天子位に即かひて御母を貴み此号を奉る也是を女院といひ此

をば即建礼門院といひ餘は推して知るなり 皇子體仁を生之を宗徳帝の養子

として太子をらしむ御歳四あり禪るを受ぬ是を近衛帝と申奉る

在位十四年久壽二年御歳十七にて崩す依て宗徳新院 **新院** 上皇

二人在時は前なるを本院と云 御位に復せん事を希ひぬ皇子重仁又長し

後なるを新院と申奉るなり 加いて買名を申しんば中外望を屬く然るを美福門院近衛帝の蚤世

を呪詛の所為と密に鳥羽上皇に勸を崇徳新院の同母弟王子雅仁を

立是を後白河帝と申奉る朝野駭する者無一新院深く憤懣を懐し  
 左大臣藤原頼長と名御鬱情を語せしめ頼長元來慧黠新院を位  
 復せ免己朝權を專らんと欲し乃從憑して兵を奉んとす時保元元年  
 七月本院崩玉ひくれば即夜之を葬り上皇兵を奉て白河殿を據源為義  
 等之屬す平清盛は主上の名を應て宗を擧て宮城を赴く此源の  
 義朝は父兄を離れて主上方にありけるが義朝を勅して白河殿を攻む  
 清盛をも同く往む清盛の長子重盛父を從て其西門を攻西門の  
 將源為朝善く拒ぎ先鋒の二將之が爲に射殺せらる然れども寄手烈しく  
 進んで攻立るめ終つて白河殿陥り上皇出走如意山に入り髪を削て  
 南都に奔る途に執るん讚岐に遷る頼長矢中を已りて自殺す

帝清盛を詔して爲義を捕へむ未だ之を獲ず清盛の叔父平忠政  
 出て清盛を依りて降を乞ふ聽さず之を殺す朝議因て義朝とて爲  
 義を殺す一免清盛を播磨守に爲す重盛以下賞を受る差あり保元  
 二年清盛超て太宰大貳に遷る **太宰大貳**  
太宰府は九國及壹岐對馬を鎮撫す其  
 任の重き義を取て太宰と号す九國三嶋は  
 各國司有とすとも大國中て外夷を迫るを以て兵亂を鎮る爲に此府を置帥以下の官人を選ば  
 らるなり帥は此府の長官九國三嶋の管領なるに依て此稱あるなり帥はむきぬるの義あり大貳  
 正貳は其次官なり蓋し此府を始て甲第を六波羅に與す **甲第**  
宅は甲乙次第あり  
 置るの始は不分明なりとせ  
 源の義朝平氏の聲望己れの上り山多めり  
 心常外之を嫉む藤原の通憲清盛の女と娶り婦と爲亦義朝と際  
 あり通憲大議を參與し整正する所多し正治元年帝位を太子に授  
 り是を二條帝と申奉る然りて上皇仍政を聽め通憲亦朝政を

專まかす上皇みかどの嬖人ひいじん藤原信賴ふじわら しのぶ近衛大将ちかえ だいしょう為ならん事を求もとむ

左近衛右

近衛ちかえの西にし存ぞん在ざい 天子てんしを近ちか衛えり奉ほうる故ゆゑ此こゝ名なあり此こゝ大将だいしょう亦また左右さうぶあり予よ箭や兵へい杖じょうを帶たし

天子てんしを守まもる是こゝ武官ぶくわんの極官ごくくわん文官ぶんくわんの大政だいせい大臣だいじんに准したがふ嵯峨さあが帝ていの御時ごときより始はじり置おく

信賴しのぶ慚あは恨なして乃すなはち義朝よしかぜと深ふかく相結あひむす納なし陰いんに同意どういの者ものを招まきて乱らんす

作なりんと謀くわる謀くわ既すでに定さだまる雖なほも清盛よしみを畏おそれて敢あて發はせは是こゝ年冬ねんふゆ

清盛よしみ重盛むねもり筑後ちくご守家まもり貞等さだら五十人いそにんを率りやうめて熊野くまのに詣まりて切部きりべに

至いたる時とき六波羅むつばらの使者しや来きり告つて曰いふ昨夜こゝろ信賴しのぶ義朝よしかぜ源頼政げんらいせい源光基げんこうき等

と兵へい五百いほひを率りやうめて三條殿さんじょうを圍かこみて之これを火か逆さかし納言のうごんの筈はずを火か殺ころ傷や無な筈はず

遂すなはち上皇みかど及および主上ぬしを禁内きんない小幽せうす少納言せうなごん亦また害あせらるる衆しゆ愕然おどろとして色いろを

失なふ清盛よしみ曰いふ耳みみに熊野くまのに到いたりて之これを計はかるる重盛むねもり曰いふ武臣ぶしん天子てんしの急いそに

赴おもむく何なにをも猶豫うやうやす危あやきと馬首うまのかぶを廻まりて北向きたうに衆しゆを率りやうめて疾馳はやす途みちに

一騎ひとの来きるも遇あふ騎き至いたりて曰いふ六波羅むつばらの兵へい駕がを迎むかへて阿部野あべのにあり請こふ

速すみに御歸ごき有ある衆しゆ踴躍うようして京師きやうしに入る信賴しのぶ清盛よしみの既すでに還かへるを聞きて

諸門しよもんの守兵まもりを益えきす清盛よしみ帝ていを拔ひん事を計はかり藤原惟方ふじわら だけかたと謀くわを通とほし

夜よる火かを二條大宮にじょうに放はなつ門かどを守まもる兵士へいし守まもるを捨すて之これを救すくふ天皇てんかう乃すなはち皇后こうご

と同乘どうじやう衣きぬを蒙かぶり車中くるまに伏ふし惟方だけかた從まりて藻壁門もろかきより出いれば重盛むねもり

三百騎さんひゃくきを率りやうめて途中ちゆうちゆうに迎むかへ謁えつし六波羅むつばらの筈はずに入いり奉ほうる百官ひやくくわん萃あり来きる

已すでに上皇みかど又また仁和寺にんわじに逃にげ信賴しのぶ等ら仍またに大内おほうちに據よる帝てい清盛よしみを名速なに

賊ぞくを討うせん事を命めいぜらる清盛よしみ乃すなはち重盛むねもり教しゆ盛頼せいのり盛もりを將しやうとし三百騎さんひゃくきを勒りやく

一ひと路みちを分わかて大内おほうちに赴おもむく賊ぞく白旗しろはた二十にじゆ旗はたを樹たて之これを守まもる寄手よせ望のぞみ色いろ動うご

く重盛むねもり衆しゆを勵むして曰いふ年は平治へいぢなり地ちは平安へいあんなり而しかも我われは平氏へいぢなり

國史通記 卷一

六

平の重盛

源の義平

紫宸殿前の

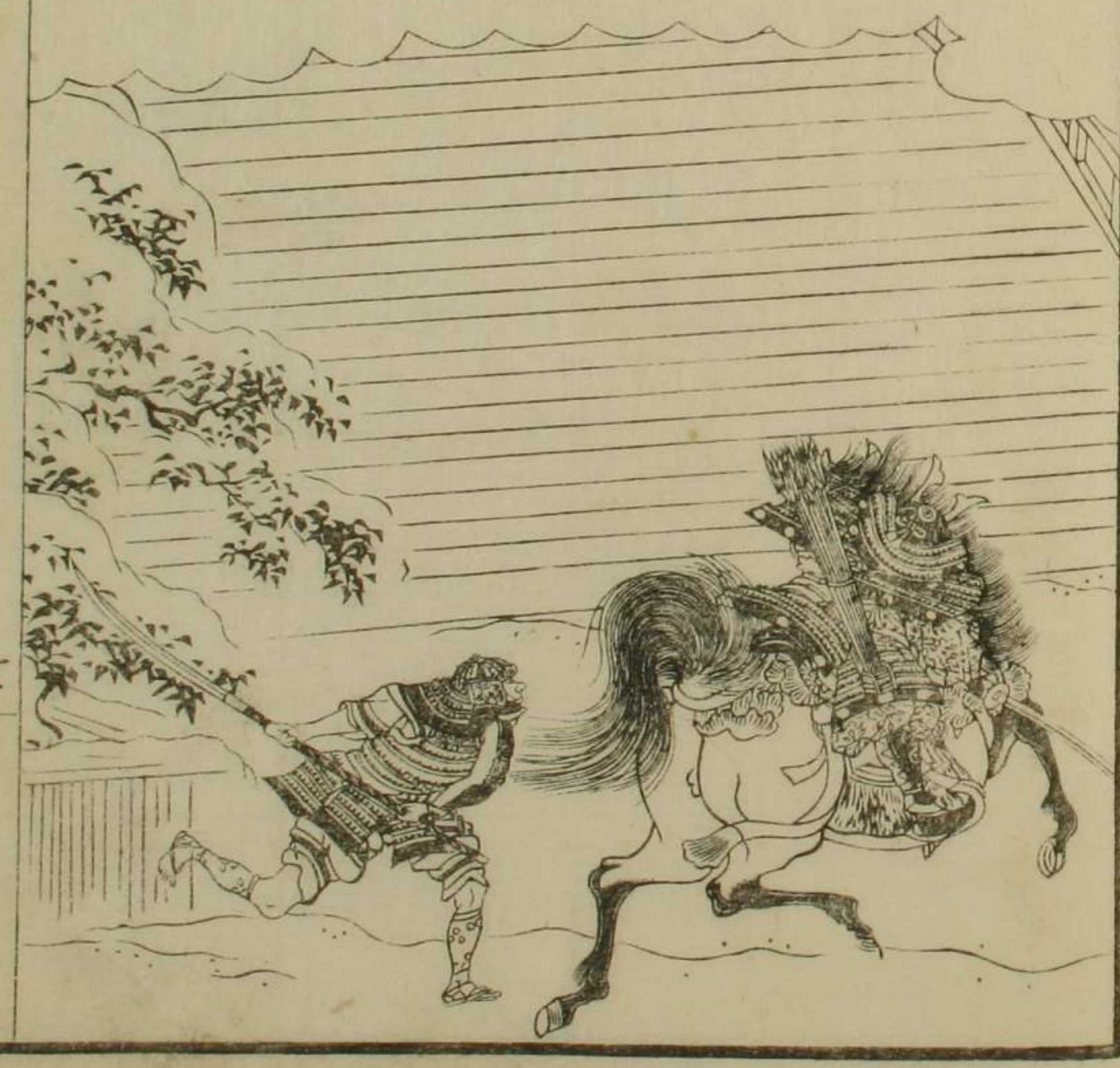
櫻橘樹は

七匝一て大か

戦ふ



紫宸殿は南面の殿なるを以て之を南殿ともいふ東西十一間南北八間半皆板敷なり四方板椽あり賢聖の障子は殿の奥北の長押の上を南向あり此殿は御即位節會等を執行はせむ故に殿上の殿とす禮記云君之南嚮答陽之義あり臣之北面答君之義也左近櫻右近橘は此殿の南庭階前あり江談曰櫻橘之兩木は舊跡なり橘樹の地は昔遷都の以前橘本大夫の宅地の跡なりと拾芥抄曰櫻の木は本是梅也桓武帝遷都の日之を植ふる兼和中并至枯失す仍仁明帝の御宇に櫻橘を植改ふるとなり



天吉兆を示す勝利必定なりと兵を今て二隊と一隊は大宮巷に留め  
一隊を以て待賢門に押寄大呼で戦を挑む信頼恐怖と馬より墮つ  
重盛門を排して攻進み大庭の掠樹の下に至りて源義平と大に戦ふ  
紫宸殿前の櫻橘樹を七匝して出大宮巷に至りて杖突て休息す  
平貞家之を見て百平將軍の再生と謂をんと重盛新手を入更て復入り  
義平と戦ひ二卒を殺せり重盛間を得て走る此時頼盛等郁芳門を  
攻義朝と戦ひ退走す源氏の兵宮を空にして出追ふ教盛乃千騎を  
以て横み大内に入り諸門を関て之を守る義朝義平獲所無くて宮に  
還れば宮上皆赤旗なり進退據を失ひ進て六波羅を攻む亦利あり  
遂に大敗走す此に於て頼信を始其黨五十四人を捕ら信頼を六條

磧に斬帝清盛の戦功を賞し其子弟の官爵を進む尾張人長田忠  
致義朝を誅し其首を獻せしを獄門に梟す頼盛の將平の宗清義  
朝の少子頼朝を捕へ至り將み之を斬る子宗清之を憫み清盛の繼  
母池の禪尼に因り宥を請ふ重盛頼盛も同く宥せんを請ふ之に依り  
死一等を減し伊豆に流す義平服を更京師に入清盛を狙殺す清盛  
捕へて之を斬此より平氏威を天下に振ふ此時に方て政上皇より永曆  
元年上皇清盛に正三位を進參議に任す二年清盛累遷權中納言  
に任す重盛正三位參議に至り永萬元年秋帝崩御諸寺僧徒葬に  
會す延曆園城の二寺礼を争ひ鬪んとす上皇源頼政を召自衛を  
努め小の上皇平氏を圖ると訛言す平氏大驚急り兵を聚む重盛曰

事必妄也。んとき上皇来て平氏の第に幸しぬ。清盛疾を称し

て出せ上皇還ぬ。何者。此訛言を為せしと左右の問はせぬ。藤原の

師光前て曰く天之言も。のみと衆敢て應る者なし。師光は阿波

の人其性狡黠。後髪を削て西光と称し。院の北面とありて頗る寵

北院の侍あり上北面は四位五位下北面は六位あり上は院内の昇殿を聽するなり心平氏の驕恣を嫉み數間を美

て上皇に説く時。太子嗣立是を六條帝と申奉る。帝幼なるのみ。り

政復上皇に歸す。上皇の寵后。熾子は清盛の妻。時子の妹なり。憲仁を

生上皇之と立んと欲す。仁安元年清盛を以正二位叙し。内大臣に任

二年遂に從一位に至り。太政大臣に陞り。隨身兵杖を賜兵杖と

兵具の事。ゆへ太刀予箭の類なり。太刀をゆへて弓矢を持後なる故。隨身をゆへて連る事也。ゆへて兵杖宣下といふ。文官は攝政。閔白といふも大將を無とては隨身と連る事はなからぬ。史御免

却免し。及ぶに之を連るなり。輦車宮に入を聽せ。勅て邑に播磨肥前肥後

賜けり。大功田とし。世襲せむ。重盛從二位に叙し。權大納言に任し。帶劍

昇殿を聽せむ。次子宗盛從三位に叙し。參議に任せむ。三年皇子憲仁

御歳五ぬ。禪を受。是を高倉帝と申奉る。此時に當り。平族朝官に

る者六十餘人。其采邑三十餘州に跨る。朝政盡く清盛に決。清盛疾を詔

し。非常の大赦を行。れ以て之を禱る。既ぬ。清盛髪を削て淨海と稱し

別第を西八條に興し。て之に居童三百人を撰み。京師内外に散布し

誹謗の者を察し。輒法に處す。京師眼を側の上皇積て平なる能む。せ

ゆは。嘉應元年上皇髪を削て法皇と稱す。平氏益横なり。重盛の

次子資盛。途に攝政藤原基房に値て馬をり。下らば徑ち其衛を



衝く衛士梓と之を下も後基房衛士を縛送して以て謝す重盛其縛を解き勞と之を遣る清盛之を聞大に怒り三百人を伏て基房を途小要し其車を推折し從者の鬘を切て放還す帝因て三日朝を輟させぬ重盛資盛を伊勢に逐遣る承安元年清盛其女徳子を進て女御とす遂小立て中宮と為す

**女御** **中宮**

天子の御妻より更衣あり其上の女御あり御妻より

中宮あり其上に后宮あり也往古は中宮も后宮と同一事なりし桓武天皇の御時より中宮后宮と二宮を並置る

同四年右近衛の大將闕く重盛奏請して自ら之を拜す治承元年左近衛の大將を轉し尋て内大臣を拜し小松の弟を居る弟宗盛右近衛の大將となり已より正二位に進む朝臣擧て平氏を妬む藤原成親權大納言を以て法皇執事と為る

**執事**

執柄も同し院中の百事を總管する權柄を執と云意も此称あり

成親殊に大將たる事を希て

得て居常憤々遂に平氏を滅せんと圖る乃西光と藏人源行綱と郷食し密に意中を語り行綱之を諾す成親遂に檢非違使平康頼武部大輔藤原章綱前近江守源成雅等と結び又法性寺執行俊寛と結んと欲し

**法性寺執行**

此は都て寺務別當にも一寺の惣領なり但し是を高野山にては檢校といひ山門にては坐主といひ東寺にては長者といひ勸修寺にては長吏といひ

同義あり鹿谷の別館小會と事を計り祇園祭日京師雜還の時に乗ト火を平氏の第に放ち疾之を攻て勢を逞すなり諸將向ふ所を部署して未だ發せぬ行綱事の竟に成なりとるを度り自首する小如也と思惟し馳へ福原に赴き事の仔細を清盛に語り清盛之を聞て大に駭き直に京師に歸り悉く子弟宗族を召先づ西光を縛し掠治して實を得又成親を召て之を小室中囚に成經康頼以下を逮捕す此

於て清盛甲を被薙刀を執て出平貞能を召て曰亟く將士を戒せよ今  
舉朝の人我を嫉我を圍る蓋我官爵分踰ると謂ふのみ淨海保元  
の變平治の乱共命を重んと貶を輕んと凶黨を夷滅す一之官家の  
為に非無し而今輕く讒言を信し我宗を族滅せん欲即告る  
者無くば危ふわなや我先發して上皇を鳥羽宮に移せん否は此所  
牽て請人のみと主馬盛國之を聞馳て重盛に告り重盛大に驚き急  
西八條に赴く筈門に入は族人皆甲を擐馬に鞍おき旗幟列を成し  
將に起んとす重盛烏帽直衣にて入る宗盛其袖を扣て曰く公何を以て  
甲を被玉はざる重盛睨て曰汝等何を以て甲を被る敵人何くか  
吾は大臣大將たり寇賊關を犯有る非れば則甲を被るべし清盛之

を望見て遽に起て黒衣を表めて出數襟を正す襟呟て甲觀重盛に  
謂て曰吾西光の状を察するに成親等の如きは枝葉のみ事必源あり  
我姑く上皇を請て一邊に牽せし事定るを待んとす語未だ畢せざる  
重盛泣數行下り久して言て曰重盛尊貌を熟視するに家門已に衰  
運に屬する重盛之を聞せし四恩あり皇恩を宸とす抑我家祖  
先平將軍の功有るも國守刑部卿内の昇殿を聽せざる止まる大人に  
至るに及べ乃大政大臣に陞り兒の不肖を以大臣大將を辱らす宗族  
朝廷に滿田園天下に半ばす恩を叨みする極れ官家の為に疾まる  
誰の宜なるもと謂んや重盛六位より三公に至る君恩に沐浴する擧る  
勝るるは向背の決自に在る有素撫循する所の士重盛の為に死を

希ふ者二百餘人保元の乱源下野守勅命を以六條判官を斬兒當時  
 非在て以為大逆無道言母忍るるも此也此大人の親く睹る所母  
 非や忠あるんと欲ば則孝あるは孝あるんと欲ば則忠あるは重盛進  
 退此窮る大人必ず今日の擧を遂んと欲せば先重盛の首を刎然る  
 後發しんと且言ひ且泣擧坐感動す清盛曰く淨海衰老を以て此  
 擧を為す一身の為よ討る非又子孫を慮のみ以不可あるんぬ汝好  
 之を討んと乃起て内よ入る重盛顧て諸身を讓て曰く今日の事縱令  
 公は老耄して事を發すとも子等何れ之を匡救せば一を懲通する  
 やと出て將士を戒て曰公は從ひ院に赴んと欲する者は重盛が首  
 を刎るを見と然る後行と乃小松の第に還る既めて夜憂慮して

措事欲はと令を出して兵を徴曰く大事あり速に來り會せよと  
 衆相告て曰沈重の人此の事と令を出必よあるんと争て之に赴く  
 一夕二萬餘騎而て西八條復一人無一重盛乃家貞貞能を西八條に  
 遣て清盛を護せしむ清盛問て曰く小松第何由て兵を徴す二人  
 對て曰内府に宣して曰汝が父君恩を忘るる國家を乱んとす汝を命と  
 之を討伐せしむと内府君の急なる事と慮り臣等とて來り護せし  
 め且曰君之を安んじむる重盛身を以て當に請ふ願して清盛惶懼  
 して曰く我為内府に語る吾前途に迫る復事を支とせ唯卿之を  
 令せよと二人還り報す重盛漣然として曰父をて此語を出しむ吾罪  
 大なる事と乃親ら臨て兵を勞して曰汝等召し應して即ち來る真に

平生負かき而て事謬傳より由る宜しと返り罷去る。後緩急あらん時幸ひと今日に扭るる勿れと因て盡く罷去法皇之を聞ひ泣て曰重盛怨む報ふる恩を以てす人をて慚愧せむと已めて清盛武士の命と西光を弔せり。[四] 四は俗の剛の字して字書音察人の肉を剔て骨を置あるとの又一書其肉を活割して死す事りとりの俗の寸段々々も斬ちと云ふ同からん。師高師経を殺し成親を備前より流し後入を遣て之を殺せむ成経康頼俊寛を硫黄鳴り流す三年中宮姪の清盛月々親ら嚴嶋神より皇子を得んとて冀ふ十一月皇子を生清盛喜極て哭す三年立て皇太子と為る清盛驕恣益甚し重盛日夜憂懼し是歳五月熊野の祠に至り速く死せんことを自祈歸て瘍疾を發す適宋より一醫の來るあり清盛之を治せめんと欲す重盛辭て曰

若異域の醫をして兒が疾を治せむと我國體を失ふを如何と遂に治せめ法皇臨して其疾を視せめ八月遂に薨す年四十二法皇攝政基房と議て其封戸を収む會中納言闕く清盛の婚藤原基通當に任す愈きか基房の子師家甫八歳之に任す此時清盛福原あり土月數千騎を率めて京師に入る法皇法印静憲をて往て清盛と諭せり。且其意を問ふ清盛見れば昏み及て答る所無し静憲去らん。と請ふ時か清盛子知盛を出し答りて曰臣老して復君の事能は此のぐまのみと静憲趨て出清盛召返て對面て曰抑我家何の官家を負く所哉。重盛新死墳土未だ乾ざるに遊幸自如獨老丈を憫まざるや重盛危を見て命を授く數度官家之に越前を賜ふて曰汝

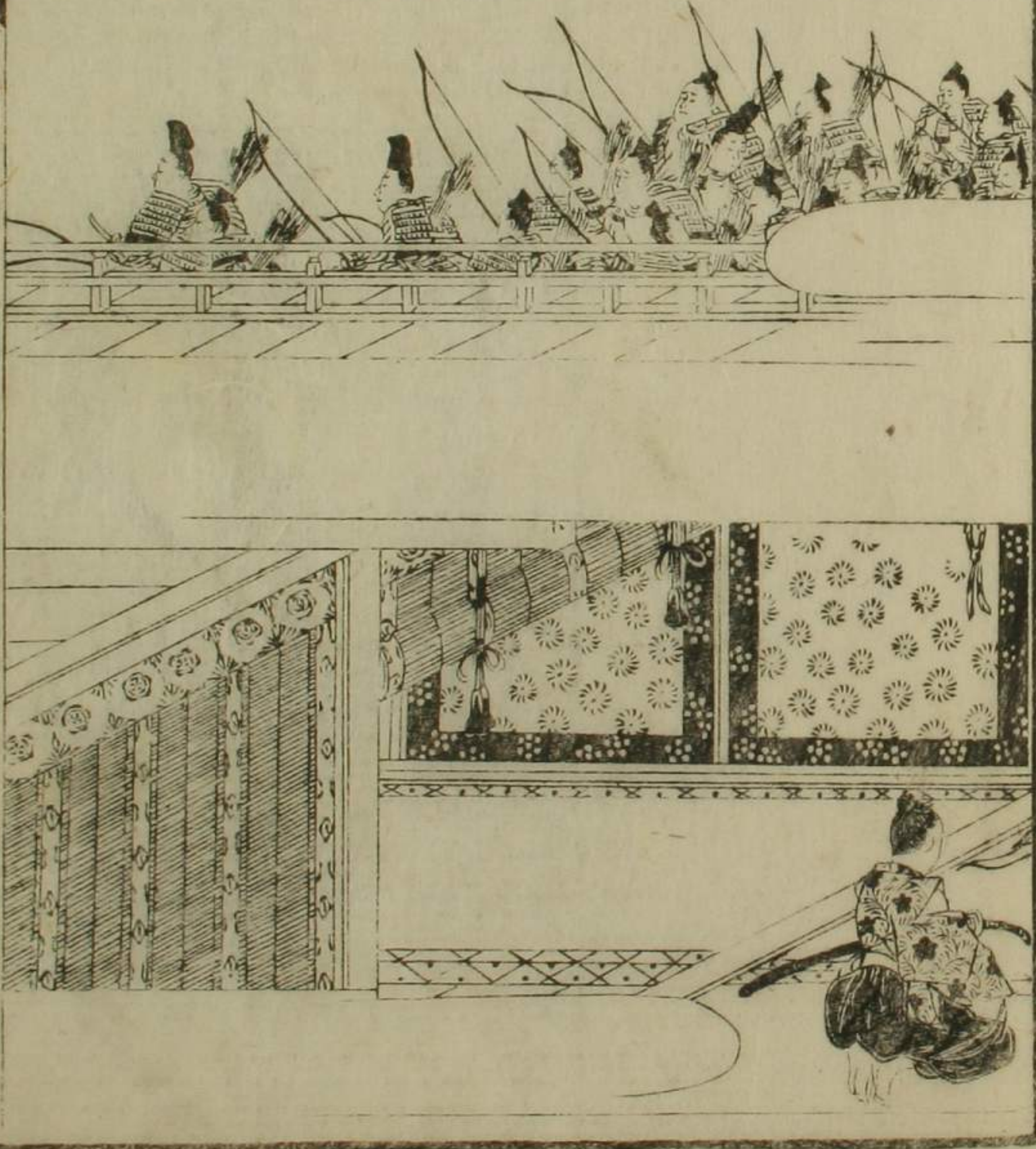
子孫傳とて死はば即禿はる死者何の罪ある且吾基通の為中  
 納言を請ふ再三而多超て師家を拜し何れ也凡淨海がぶたをの  
 即過惡あつとも宥當ふ七世も及ぶ危今餘命幾ぢ動れば將よ  
 殺せんよ身後知る危しと言畢て涙を垂静憲亦泣少して説み  
 大義を以て一且之を慰籍す清盛意頗る解る礼を返す既か  
 一帝を奏して基房を貶代る基通を以て師家以下四十二人の  
 官爵を削り前太政大臣藤原師長を流一宗盛をて衆を率ゐる  
 法皇を造らむ法皇問て曰將よ遠地を流せんとす宗盛曰敢て  
 然る非を且く鳥羽殿に幸事定まるを待せぬ危しと遂に法皇  
 を鳥羽に移し清盛乃人を一帝を白て曰く今より後諸政陛下之を

親ら為めと即日福原に遷る四年二月帝位を皇太子に禪りたまふ  
 世人皆清盛の意か出と謂ふ清盛夫人時子既か二位に拜せしむ  
 髪を削り二位の尼と稱す夫妻並か三宮に准す准三宮 天子の御祖母を  
 大皇太后宮と云  
御母を皇太后宮と云御妻を皇太后宮と云合て三宮と云なり大臣或は門跡方ちと天子のお傍に  
 召み依りて此三宮に准するを准三宮とも又は准后とも稱するなり其故は天子に奉仕せむる  
 后は御傍進きは無一其如く御傍進を出仕一且三宮は年官年爵とを年々御絡  
 ぬも同様給ひ輦車まで禁門出入す此宣下を蒙るは御寵恩深き事と有り  
 三月上皇嚴嶋に幸す清盛の意を解んを希めたり發するに臨んで  
 法皇を親す法皇の鳥羽に徙さ勢らんぬ中外皆宗盛の其兄  
 み若ざるを咎む宗盛數清盛を諫え乃法皇を八條鳥羽に還し  
 奉る五月熊野の別當亦を奉り告ぐ以仁王令を東國の源氏に  
 下し令旨 東宮又は親王后宮なるもの  
 御詞を文に書し令旨と云 平氏を滅し帝を廢し自立せんと

平相國清盛入道淨海子弟將士を令  
 將に法皇の宮に赴かめんを内府重盛  
 涙泣して父の無道を諫争す



世に四恩といふは天  
 地の恩國王の恩父母  
 の恩後生の恩是之  
 元此佛家の説ふ出と  
 又とも報四恩を對し  
 懐きは宋の歐陽脩  
 の所語能く相勸  
 登主家而夷險一節之  
 と如此則國王を報ふ  
 危し臨大事決大議  
 垂紳正笏不動聲色  
 而措天下於泰山之安  
 如此則最上を報ふ  
 其功功最著報最  
 而報最著と如此則  
 父母の名を見以父母  
 報を無此三恩を報ふ  
 則天地を報自其子在  
 小松公の如は實即其  
 人と謂を惜め天  
 其年を倭さる



欲曰事成は重賞ありんと那智新宮の僧徒亦之に應ずと清盛大に驚  
 兵を率ゐて京師に入公卿と議一檢非違使源無綱等を遣官兵を  
 以て高倉の宮を圍み將丹王と土佐を徒さんとす無綱の父頼政王の謀  
 主ら平氏未だ之を知る也頼政急み王と先奔て園城寺の僧徒を  
 倚り自ら子弟を率て之に従ふ清盛之を見ん大に怒院宣を申下し

院宣

院の御詞を兼て  
 文の書と院宣と云

山徒を誘する利を以てす乃山徒王に倍く依て

王南都を奔る清盛子重盛等を遣二万騎を將とし之を宇治河を撃しむ  
 王平等院に入橋を断て軍す僧徒亦善戦ふ此に寄手の中は下野の人  
 足利忠綱進で曰今日の利速に戦ふあり何を猶豫せんて手勢三百  
 騎を以て先渡り乃大に戦ふ終に無綱を射殺す平軍悉く渡り大いに

源氏の勢を破る頼政及び子仲綱等皆死王南をせりて出走す途に  
 流矢の中を薙りぬる重衡等凱旋し首を闕下し獻す清盛常か  
 福原を愛し終に都を此に遷さんと欲す六月遂に帝三宮百官を趣  
 して此に徙り宮城を建んと議る并地狹く建難く乃權か之を造  
 物議囂然せり八月源頼朝以仁王の命を奉り兵を伊豆に擧げ  
 相模の人大庭景親撃て之を支り急騎捷を報す且曰頼朝走を  
 死すこと已めず東人交未り告ぐ頼朝未だ死せぬ兵復振ふと清盛  
 大に怒り直に輦入上皇を見て宣旨を得て之を討せん事を請ふ  
 宣旨 天子命あり時捕人命を受て是を上卿に達す是を量りて  
 上卿其口宣と外記に達す外記是を受て書く之を宣旨といふ 即宣旨を賜ふ  
 此に於て清盛嫡孫維盛命右近衛中將を以て追討使と為

忠度之を翼々鐸鈴を賜ひ五千騎將之福原を發す齋藤實  
 盛東國の事を諳を以て郷導と一行々兵を収駿河國に至る實盛  
 曰宜く急か足柄を踰武藏相模の兵を収む處と藤原忠清曰  
 今我兵皆京畿新募る所此を以て深入するは甚不可なりと維盛  
 之并從ふ實盛乃辭て西歸す維盛忠清を以て先鋒と進を富  
 士河に軍す此時頼朝二十萬騎を以て河東に至り相持て未だ戰  
 平軍夜水禽の群起する羽音を聞て相驚駭敵軍の大き至ると為人  
 馬相踏藉して走る維盛怒て留り戰んと欲す忠清固く諫め乃西歸  
 す平明源軍之を知乃一將をて來り追む伊藤某殿戰て死維盛  
 歸て近江に至る清盛其兵を交へばて歸を怒て京師に入を許じ

維盛を流し忠清を剄んと欲す衆救解する并依て止是より先源の  
 義仲兵を信濃に起す此月上皇再嚴嶋并幸す清盛從ふ既而還  
 て宮を夢野并造り以て法皇を徒奉り清盛諸公卿を會し兩都  
 孰れも使を乞と問ふ公卿皆其旨を忤る福原使るは  
 獨左大臣藤原長方平安使なりといふ清盛色を作して入衆長方  
 の為之を危ふむ是歲十月清盛三宮以下を奉り都を平安に復す  
 衆大に悦ぶ平氏の家怪多し清盛嘗て獨り坐す階下數百の人頭  
 あり須臾合して大頭と為り眼を瞋らして清盛を視る清盛又眼を  
 瞋ら之を視れば人頭漸縮小して滅す占者曰く為義義朝等の鬼  
 多し又鼠あり厩馬の尾を巢ふ占者曰く小大を侵し子午を犯すは



源平相逼るの兆ありと云此月近江源氏の兵起る十二月知盛資盛等  
 を遣兵相將として撃て之を平ぶ初園城寺頼政の黨世より重讐を  
 得益平氏を怨む此に至り山徒と皆近江源氏相應す乃清房を遣  
 園城寺を攻之を燒夷一僧八百人を殺す又南都叛するを聞妹尾兼  
 康を遣之を攻む僧徒逆へ撃て之を敗る又木丸を造り淨海の頭と  
 為し之を蹴撃す清盛積怒一是月重衡を遣兵數千騎を率  
 之を撃し東大興福の二寺を燒僧數百人を殺す諸道の源氏益  
 興る養和元年正月上皇病で崩す玉ふ清盛稍悔悟一政を法皇  
 相復し美濃讚岐を獻して御邑と為す詔して宗盛相近畿を  
 總管せし二月源行家兵を擧ぐ美濃相至る知盛通盛清経忠

度等をて之を伐ち走らし西海の築地氏緒方氏皆源氏相應す  
 肥後守貞能を遣て之を定めし知盛洲の股相ありて病作り成を  
 置て還る源氏益振ふ宗盛親ら大軍相將とし東伐せん欲す法皇  
 之を許す此相於て諸武官を紗へ官符を以て兵を徵し此月二十七日  
 用て行を發せんす發相先づ一日清盛疾作る相より宗盛行を止む  
 車馬六波羅に集る清盛病煩熱なるより冷水を浴す水輒ら沸く  
 叫號の聲門外に徹す閏二月疾大篤病七日相て薨す歳六十四  
 法皇相遺表し事必は宗盛相議し相へ此相於て宗盛法皇を法  
 住寺殿相奉還し奏して曰く臣不肖父の過ちを救ふ能はず以て今相  
 至る今より後唯聖旨は是仰かん法皇乃公卿を會し兵食を調するを

議一重衡維盛通盛忠度等を遣美濃入源行家等を討む遂に  
行家を破り義圓を斬行家の子行頼を虜に行家を追て參河に至り  
還る法皇陸奥藤原秀衡を勅して頼朝を撃し越後の城資長  
を勅して義仲を撃し六月資長身長茂と兵を収南義仲を撃し  
利あはばて還る八月資長を越後守秀衡を陸奥守に除し趣がて  
源氏を伐し資長復發疾作て卒す九月宗盛從弟通盛經正を遣  
東源氏と越前を戦ひ敗績し經正若狭を走る通盛退て敦賀城を  
保り經正を召く未だ至らば義仲の兵来り攻乃兵を解し西に還り  
壽永元年九月城長茂復義仲を伐り利あはばて還る是月宗  
盛内大臣に任じ隨身兵杖を賜ふ二年二月從一位に叙せしむ四月

維盛通盛忠度等を以て追討使と為し山陽山陰西海諸國及び參  
河以東若狭以南の徵兵十萬餘人を以て北陸道に入り義仲を虜に然  
後頼朝及び源氏と齋藤實盛遣中入に宗盛を見し曰く  
越前は臣が郷なり古に錦を衣て郷に歸ると臣君恩を受るに  
今衰老唯一死以て君に報する有のみ冀はくは錦直垂を賜ふ臣  
衣て以て歸らば死すとも餘榮ありと宗盛憫て之を與ふ義仲平  
軍越前に向ふと聞將を遣て燈の城を守り山城山小掬給を帶  
最要地と為す而城將齋明及する中より立入城を拔連戦皆捷敵  
を追て三條野に至り又長驅して越前を定め進で加賀に入り源氏兵  
退て安宅の渡り掬平盛俊兵五千を以て先渡す大軍之に從ふ遂に

林富樫の二城を援て之ヲ據維盛七萬騎を以て砥並山ヲ軍す忠  
 度三萬騎を以志雄山ヲ軍す義仲五萬騎を以て至行家亦忠度と  
 攻之免自之維盛亦當り夜亦乘之襲擊維盛大亦敗す義仲勝之  
 乘之之を追ふ清盛の七子參河守知度戰死賴盛の次子右兵  
 衛の佐為盛亦樋口兼光ヲ討つ維盛退て佐良岳を保つ此時忠度  
 盛俊等は行家を擊破り維盛の敗れを聞兵を引く之亦合退之  
 安宅の渡亦據畠山重能平氏の前軍亦在進んで無光と闘ひ殺傷  
 相當維盛等乃進て義仲亦當り戰ひ且退き成合亦至て又擊つ  
 大亦戰ふ大場景尚自呼を闘ひ十三騎を斬て落其身も創を  
 被りて自殺す衆悉く退く實盛獨留戰ふ敵將手塚光盛呼ぶ

其名を問ふ實盛曰く汝我首を斬て木曾公ヲ獻けよ公我を知るなり  
 と乃進て相闘ひ光盛遂亦實盛を刺し頭を義仲亦獻其狀を告  
 て曰く單騎錦を衣其語東音なりと義仲之即實盛なりと謂ひ  
 無光を召して之を視せしむる實盛なりとて義仲曰吾實盛の年  
 高なる事を知る今其髮の黒は何れ也對て曰實盛嘗て臣と東國  
 言て曰白頭軍の從は吾將也我髮を涅んて否れば則壯者亦伍  
 難しと蓋其言を踐ち乃其首を洗ふ白頭髮皆白し義仲泣て曰  
 吾幼かりて孤となり此老を鞠育せし若し来り歸せば父と事ふ所を  
 と石を収めて之を葬る義仲復平軍を追ふ平盛綱藤原景高等十  
 餘人亦死す平軍皆敗て歸る法皇會議藤原の長方漢匈奴と

和するの事と引て諸源の罪を赦せんを請聽せし平氏書と山徒の遺  
 と之を誘す山徒從はは七月貞能西海を定降將菊地高直原田種直  
 以下兵千騎糧十萬石を以て至る平氏成喜が用て東北を防んと欲す  
 而も義仲已に近江に至る此に於て資盛知盛重衡貞能等と宇治勢田を  
 守る已りて源行綱等京師を四窺し山徒亦義仲が黨す宗盛乃諸  
 將を召還貞能を遣て行綱を櫻津に擊しむ知盛五百騎を以て粟津  
 外次へ義仲の前軍と戦ひ利ありて退く義仲進んで叡山に軍す  
 宗盛大に族人を召て會議し帝及法皇を奉りて西國に奔り以て再舉を  
 圖んとす人を法皇に遣りて法皇在る宗盛大の意を失ひ乃帝及  
 皇太后皇身惟明を奉りて劍璽を収め火を諸等に縱り一門を擧率て

西よ去る関戸に至る顧見は數百騎至あり近は則維盛其諸弟を率  
 て來るなり衆大に喜ぶ此は后宮亮經正は幼より仁和寺法親王に仕ふ

法親王

王子の御出家に成らせぬひるが親王号を御免有るのみならず  
 入道親王と云は只今を親王と云はるが親王と云はるが御免有るのみならず  
 入道親王と云は只今を親王と云はるが親王と云はるが御免有るのみならず

嘗て其愛

せむ勢めん琵琶を賦けり征行と重必は携ふ是日齋返す王詔し  
 て曰く臣等事已に此に至る願くは一別を叙て行んと欲と因て即席數  
 曲を彈す滿坐皆涙を垂る乃琵琶を奉還て去る忠度亦淀川より  
 還り其和歌の師藤原の俊成の許に至り面謁を請て曰く兵興に  
 より君門に數すを得今當に遠別す君勅を奉りて撰集する  
 所ありと聞臣幸ひ一章を収るを得は死とも且朽と下り乃其歌  
 集を鑑縫より出す俊成泣て之を受行盛俊成の子定家を師とす

亦其集を遺て留別す俊成定家並に撰集み二人の什を収とり  
 此に於て舉族輿を奉じて西福原に至宗盛方其將士を會議して  
 曰我家の如きは惜む不足る帝王神器を如何と衆皆泣對て曰臣等  
 世々君恩を受隆替を以て志を易んや海を窮め天を極む唯君の  
 適所を從はん宗盛喜び乃相率る清盛の墓を拜し樂を墓  
 前を張て徹夜し天明て宮殿諸筭を焼拂ひ航して西海に赴む  
 法皇勅して平族百十餘人の官爵を停め悉く其邑を没之を義仲  
 等に分賜し乃高倉帝の第四子を以て位に即め平氏之を聞て  
 其取去るを悔め遂に帝を奉じて行在所を豊後建豊後の國司  
 藤原頼輔の子頼經州人緒方維義と院宣を傳へ西海の兵を収む

使を來しと曰く公等此に止まる處を候時忠之を讓て曰正統の天子此  
 在如何者此言を為す維義對へ以三萬を以て來り攻乃貞能高直  
 種直等を遣て之を拒がむ其敗れ還る依て箱崎に奔り遂に山鹿に  
 徙る菊地原の諸族皆叛するを聞則又柳浦に徙る宇佐の宮に祈る  
 又維義の來ると聞終に海に航して遁る清經自ら終に免る處を  
 を度り海に授て死す時長門國は知盛の管する所なれば其自代紀の  
 通資目代 或は是を眼代と云今時の目付役と同 性普遠境の國司我意に任し政路私  
 あつて之を慮て嚴直の武士を擇て諸國にありて邪正を見せむを目代と云  
 船百餘艘を獻ず之に依て讚岐八嶋に徙る阿波の豪傑田成能千騎を  
 以て來り附し且四國に徇へ諭す其順逆を以てす來り屬する者多し  
 因て屋嶋に行宮を建行宮 天子行幸し之を止る處を  
 處を行宮とも行在ともいふ 遂に山陽道に徇ふ

知盛ノ馬陸ニ放サレ主ノ方ニ  
 向フテ三斬シ恩ヲ謝スルモノニ  
 似タリ昔呉ノ孫堅董卓ヲ討  
 テ利アラズ創ヲ破ムリ馬ヨリ  
 墜草中ニ卧ス軍衆分散シケ  
 ルニ馬營ニ還リ馬將ス依テ  
 軍人馬ニ隨テ草中ニ向ヒ孫  
 堅ヲ尋得テ營ニ還リ又唐ノ  
 韋韋一馬ヲ獲ス或時戰ニ過テ  
 馬ヨリ墜馬足ヲ踏ラン地ニ在レ  
 釋テ垂テ迎ヘテ主ヲ乗セシム  
 皆是主恩ニ報ウルモノナリ若  
 人トシテ恩ニ報ウルヲ知ラス  
 ンバ馬ニ愧ル萬々ナラズヤ



新中納言知盛ノ乘馬主恩ニ謝ス



閏十月源義仲等來り犯す重衡通盛等三百餘艘を以て逆へ撃平水  
 嶋の城を據源氏千餘艘を以て來り攻大敗走す追  
 撃して義清幸廣を斬首を獲る事十二百級初篠原の戦平氏の將  
 妹尾兼康倉光成澄を虜らんとす欺て成澄を掩殺板倉の寨を據  
 今井兼平來り撃兼康敗れ走る義仲將小屋嶋を攻んとす時頼朝の  
 來て已を討と聞乃東歸十二月教経等源行家と室山を戦ひ大に  
 之を敗る山陽南海十餘州來り屬する者多し是時當て義仲兵を  
 擧て及一京師を暴掠遂帝を閑院法皇を五條の宮に幽す公卿  
 皆裸跣して遁る義仲乃公卿以下四十九人の官爵を奪ひ其妻兄藤原  
 師家を以て攝政と為す京師其暴甚苦し明年山陽既に定るを以

廳衆  
 訓て即政事  
 を行ふ亦あり  
 廳衆といふは  
 京都より其  
 國より下りて政  
 事する官  
 人をいふなり

帝を奉じて福原を復る因て二城を設多山を負海に臨兵を集めて之を  
 守る二月教盛五百騎を以て備中下道に屯し讚岐の廳衆及て來り  
 犯すより戰て之を敗り追て淡路に至り之を鑿し源義嗣源義久を  
 并殺遂に河野通信を伊豫に攻む通信安藝に遁れ緒方維義と合し  
 備前今木の城を據教盛赴き攻先一晝夜これを抜く宗盛帝に奏  
 して教盛を正二位大納言を進む辭して拜せ及是時頼朝の二身範頼  
 義経義仲を討て之を殺し遂に院宣を以て來り攻む關東の將士悉  
 之を從ふ期を刻して會戦す知盛重衡東門を拒ぐ貞能等西門を拒  
 ぐ資盛有盛師盛兵七千を以て北門を守り義経萬騎を以て夜を之  
 を襲ふ我兵大敗走す此に於て教経通盛盛俊等代て之を守り範頼

東門に至り土肥實平等西門に至り藤原景清等力戦して西門を拒ぐより敵入る事能はば重衡知盛又東門の敵を撃て之を卻り已めたり義経間道より来り火を縦ち城卒を陷る重衡西より走て仕家長か獲る忠度亦岡部忠澄を討つ経正走り自殺す其弟経俊及通盛業盛師盛清定清房盛俊等皆死す教経航して淡路に赴き宗盛帝を舟に奉ず敗兵舟を争て多く溺る知盛の子知章敵を遮闘して討る知盛間を得遁れて舟に乘教盛亦舟を望んで馳熊谷直實か討ち義経諸首虜を以て歸り之を法皇に獻す法皇人をて重衡に諭さしめ曰汝書を宗盛に貽り神器を奉還せしめよ重衡乃書を作り院使之を屋嶋に達宗盛を表して曰く謹んで宣旨を領す但神器舟至

ては須臾も聖軀を離るる者なく陛下尚貞實清盛の遺勲を思はば辱龍駕を枉て西州に臨幸し王臣等護て西南四道の兵を以て乱賊を討ん否は則臣等三韓契丹に赴く有人の命を奉る能はば法皇之を見て怒せ玉ひ重衡を頼朝に附して誅せむ是年三月維盛間を屋嶋を出て京師にゆき途梗て達せし是を於て高野に赴き那智の海に投じて死す頼盛京師に在るを頼朝書を以て之を招き曰必法皇清を携ふと頼盛則東行宗清從はば頼盛を送り近江に至り西屋嶋に至る是月貞能の弟貞継兵を伊賀に起し平氏に應ずる者二百人を集州の守護大内維能を襲ひ破り遂に近江に入源秀義と戦て之を斬る已むと惟能が為か敗れて死す世よ之を呼ぶ三平氏と云平氏山陽道を復せん欲し九月



行盛兵二千を以て兒嶋に屯す。範頼十萬騎を以て來り攻め我軍敗れ還る。明年春知盛長門引嶋に城を築き門司関を扼し又兵を遣て土肥實平を備前を撃破り兒嶋を復す。又河野通信を撃破り其族黨百六十人を斬り首を屋嶋に效し宗盛之を檢す時田成良曰敵來り襲ふ請急舟に上り將士と陸に拒めよと乃之に従ふ。義経果して襲ひ至火を行在る。縦つ我兵盡く舟に上海陸に又射る時景清岸に上り戰を挑む美尾屋十郎來り鬪刀折る走る。景清追其銜を攫り曳銜斬り之を籠刀に挂け呼曰我は景清なり誰り來り勝負を決せよと敵敢て近く者あり我兵踵で陸に上り大に戰佯り退て舟に上り以て義経を誘致す。宗盛教経を召て曰義経の兵數百騎は過は公の戰を煩さん。教経盛嗣景清等三十人と陸に迫り射る。

教経勁弓長箭敵の精騎數十人を射殺す。日暮る會義経軍を高松に退し我兵夜義経を襲はんと議して果して天明義経七千騎を以て來り攻め我三十人短兵接戦し敵軍披靡す。教経因て之を射戰終り利あり。遂に舟に上り退り源氏の軍日盛平氏乘輿を奉り志度に避く。義経復來り攻るに依て退り引嶋を保つに已りて長門周防悉く源氏に應ず。乃箱崎に赴く。範頼の大軍豊後に在り聞旋て壇浦に泊す。源氏の軍海陸に充塞り兵艦三四百來り攻め我艦五百之に當り奮撃大に戰東軍數卻り。田成良義経に降り告て曰平氏帝を兵船に徙し兵を帝船に徙敵を誘て夾撃んと謀り義経乃乘輿の在所を知り軍を合て疾攻知盛帝船に赴き手づから船中を掃除し盡く汗穢の物を棄時子乃帝を抱き劍璽を

三十一  
校出て船首より立帝時より八歳何くか之を問王ふ時子曰虜天を御船  
小集故小他に従はんすと遂に俱小海に投して死す皇太后継て投す  
東兵其髪を鈎して之を獲たり行盛有盛皆力戦して死す教経驍名  
素より著る敵争て之を得んと安藝守家村は力二十人を無たつて  
二力士を率ゐる教経に當る教経一人を蹴仆二人を左右に挟み海に投して  
死す宗盛清宗父子は自裁する事能はれ従士惡て之を海に擲落  
すよ又酒で遁さんといひ知盛之を聞切齒して曰吾以死す也と教盛と  
皆自殺す平家長等八人より殉ふ時壽永四年三月二十四日なり経盛  
資盛皆遁れ己めて自殺す宗盛父子皇太后平時忠以下義  
経小従ふて東に義経の弟を拘五月宗盛父子を鎌倉に送る又送つて

京師に還す途篠原に至ると父子とも斬る時忠等皆流する時  
義経頼朝と隙あり逃れて西海に奔る頼朝其平氏の遺黨と相依託  
して乱を作らん事を恐北条時政を京師に遣平氏の胤子諸國に伏匿する  
者を購索し幼狭は之を生埋し稍長する者は之を刃す其母若は保往々  
隨て死啼哭四聞ぬ維盛の子六代僧文覺は因て宥を請頼朝素文覺  
を重す且重盛の徳を思ふて特小之を宥す髪を削り文覺の父子と為  
後文覺不軌を圖るよ及六代に坐死せる維盛の弟忠房檀浦を遁れ紀  
伊に匿る知盛の次子知忠備後を匿れ後伊賀に徙る平氏の舊臣藤原  
忠清捕らんと斬る平貞能髪を削り重盛の骨を奉常陸に隠る忠清の  
二子忠光景清平盛嗣等と各處に匿る後八年鎌倉に土木の事あり

頼朝之臨忠光後徒雜り之を刺んと欲し事成らば之を死後五年  
 知忠伊賀より京師に入法性寺の側に匿る盛嗣景清之を聞て皆至る  
 諸奮臣稍々来り屬す此に於て頼朝の妹婚藤原能保を襲はんと  
 謀る能保之を覺り兵を遣て圍攻む我兵二十四人乱射敵を殺して討  
 死す知忠友方と俱か自殺す盛嗣景清遁れ走忠房の紀伊に在を聞  
 往て之を歸し兵を奉て湯淺の城に據り熊野別當が為に攻破れ忠房  
 捕らて殺さる盛嗣景清又遁る會頼朝東大寺に慶す景清衆中  
 か雜り之を刺んと欲す事覺はれ捕らんと殺さる盛嗣姓名を變て  
 但馬に匿れ後京師に入捕られ遂に斬らる

史學子童觀抄卷一終

